



八丈産牛乳の存続は・・・これまでに見えてきたもの

請願書が採択されました----1133人の署名を添えて

JA八丈島支店(以下JA)の牛乳工場閉鎖が決まって半年がたちました。このままでは八丈産牛乳は一滴もなくなってしまうのかと、何もできない自分にあせるばかりでした。しかし、八丈牛乳をなくさないでほしいという消費者の思いには根強いものがありました。署名は、そうした住民の声をどうすれば町に届けられるのか、考えた末の行動でした。

「八丈産牛乳の存続と酪農家への支援を求める請願書」(八丈産牛乳を応援する会 代表 鈴木明)は署名とともに八丈町議会議長宛に提出され、9月12日定例議会において全会一致で採択されました(このあと45名の署名が届けられています)。紹介議員は、伊勢崎和鶴右衛門、土屋博、小澤一美、菊池孜行、菊池綾子、佐々木治、長戸路義郎の7議員と奥山幸子でした。夏休み中にもかかわらず、多くの署名をいただくことができたのも、老人クラブ会長の鈴木明さんや連合婦人会長の沖山操さんをはじめ、各小中学校、高校、保育園など、多くの方々の協力があつたからだと思います。後日、期間が短かったので、署名の機会を逃してしまったという声もたくさん聞かれました。

町の方針と対応は

ここ数年の、酪農家と牛乳工場の苦しい経営状況を踏まえて、都や町は乳牛から肉牛への転換を推進してきました。BSE(狂牛病)問題をきっかけに食肉の安全性が問われるようになり、国内産の肉に対する信頼が増し、消費が伸び始めたこととも思われます。都や町は、これまで酪農家や畜産農家に対して牛の無償貸し付けや堆肥施設の補助などで支援してきており、肉牛に対しては今後も支援していくそうです。したがって、牛乳工場と酪農家への支援は、都や町が打ち出した方針に沿っていないことになり、町としても対応はむずかしいとのこと。ただし、町の教育委員のなかには、島内で牛乳が生産されれば是非使いたいという意見もあります。

学校牛乳はどうなるのか

請願項目のひとつに学校牛乳の継続がありました。学校給食に、来年4月からこれまで通り八丈産の牛乳が使われるためには、様々な課題をクリアしなければなりません。まず、JAの牛乳工場を引き継ぐ新たな経営母体が必要になります。そして、これまでと同様な品質と量を確保しながら年間約194日間、供給し続けることができるかどうかは問われることになり、契約に必要な入札の期限も今年いっぱい迫っています。



今、酪農家を含む数人の有志が、「八丈産牛乳生産法人設立準備会」をつくり、八丈産牛乳の存続を願う住民の思いを実現させられるよう、支庁、町、JAそのほか多くの方々の協力を得ながら、法人の設立と牛乳工場の事業計画を進めています。

これまでJAと町が結んでいた契約は、新しい経営母体(法人)が町と契約しなおすこととなります。もし、法人がこれまでと同様の契約内容を実現できなければ、町と契約できなくなり、町は学校牛乳として常温保存可能なロングライフ牛乳を導入することになります。そうした事態はなんとしても避けたいものです。

大島では

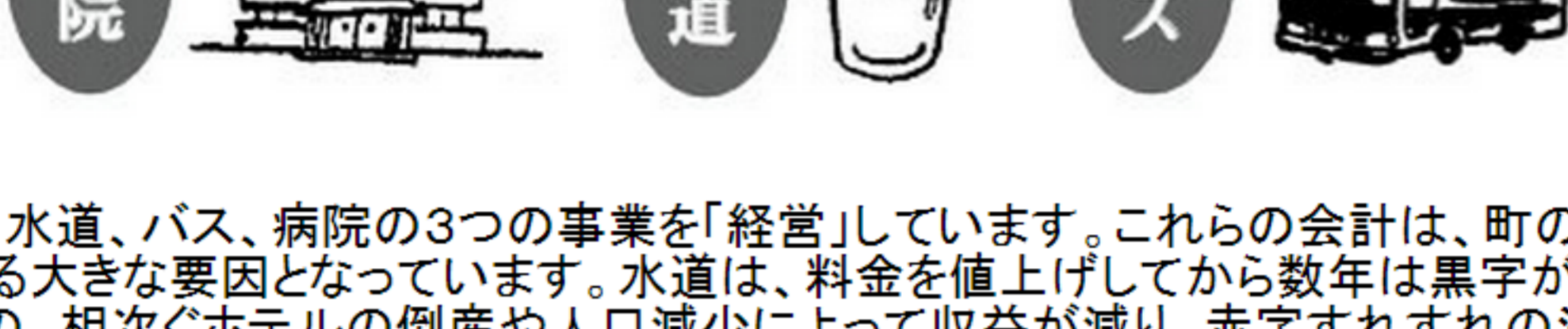
大島では、今年2月に牛乳工場が閉鎖されました。牛乳工場の再開と酪農の存続をかけて、6人の有志が「株式会社 大島牛乳」を立ちあげ、わずか5頭の牛で細々と酪農を続けています。この動きを支援する立場で、大島町は9月定例議会で大島牛乳再開に向けて1000万円の補正予算をくみしました(牝牛20頭購入費、無償貸し付け)。議会では、会社まかせではなく、地元の牛乳を買い取るという住民参加による戦略や、地元の酪農家や観光業者との連携も必要であることなどが指摘されたそうです。今後の成り行きを注視し、参考にしたいと思っています。

酪農の現状はきびしいけれど

全国的に酪農は厳しい時代を迎えています。バイオエタノールの需要が増したために、牛の飼料の主原料である輸入トモロコシの価格が高騰し、これに原油価格の高騰が追い討ちをかけています。さらに、牛乳は太るとかおなかを壊すなどマイナスイメージが先行し、かわりにお茶やウーロン茶が注目され、ついに水より安い飲み物になってしまいました。生乳の買い取り価格は、全国的に1リットル60~90円位まで下がっているそうです。大規模経営農家が多い北海道などでさえ、これ以上のコスト削減は難しいとして次々と廃業しているのが現実です。

八丈の場合、買い取り価格は高いものの飼料の高騰に加えて運搬費用もかさみ、苦しい経営を強いられています。それでも続ける意志のある酪農家がいるかぎり牛乳工場は続けてほしいし、今後も私たち消費者のために、安全、安心で新鮮な地元産の牛乳を生産し続けてほしいと願っています。

9月議会は企業会計の決算認定・・・議会での論議



町は、水道、バス、病院の3つの事業を「経営」しています。これらの会計は、町の財政を圧迫する大きな要因となっています。水道は、料金を値上げしてから数年は黒字がつついたものの、相次ぐホテルの倒産や人口減少によって収益が減り、赤字すれすれの決算となっています。バスは、車を持たない住民にとって必要な交通手段ではありますが、定期観光と貸切り観光の需要が減少し、一般会計から毎年4~5千万円を繰り入れて収支を合わせていて、繰り入れは増える一方です。バスについては、民間委託も視野に入れた議論になりました。病院については、全国的に医師の確保が困難な時代にあつて、八丈は産婦人科、小児科が確保されていて、離島でありながら恵まれています。しかし、経営はきびしく、窓口業務を民間委託するなどして努力しているものの、赤字は急激には減りません。また、3事業すべてで、増大する未収金の処理については、毅然たる姿勢で徴収に臨むよう要望しました。

9月議会一般質問

1. 温室効果ガス削減に向けて、数値目標をかかげた削減策の実施を

幸子 地球温暖化が予想以上に進んでいると言われ、6%の削減値を達成できそうもありません。自然豊かな八丈に住む私たちこそが、削減に向けてなんらかの行動を起こすべきだと思います。たとえば「消費電力量を10%減らす」というような具体的な数値目標を設定し、行政と住民がともにこの問題に取り組み、成果を公表して内外にアピールすべきと思いますが、町はどうお考えですか。

企画財政課長 八丈町では自然エネルギーのモデル島を目指して、地熱発電・風力発電・温泉施設の整備、地熱による温室団地建設に取り組み、内外にアピールしてきた。役場の電気料は様々な要因で、ここ数年微増の状態にあり、「消費電力10%削減」を住民とともに取り組むことは極めて難しい。ただし、庁舎の施設ごとに節電努力は可能なので身近なところで実践していく。温暖化防止に取り組む国民的運動に参加することは検討課題としたい。花いっぱい運動などの緑化は今後もすすめたい。

2. 人口減少の歯止め策として、新規就労者の受け入れ態勢の整備を

幸子 人口減少が加速しています。これを止めるには、若い世代の新規就労者をいかに定着させるかが、最大の課題であると考えます。今後はより間口の広い誘致策、たとえば、借入れ金の利子負担、町営住宅の入居優遇、あるいは民間賃貸住宅の家賃1年間半額補助など思い切った住宅支援策が必要だと思います。

(1)新規就労者が島に定着するために必要な条件を整え、受け入れ態勢の整備を急ぐお考えはありますか。(2)新規就労者の住宅についてはどのように考えていますか。

産業観光課長 新規就農者受け入れ策として、農業担い手研修センターの事業を着々と進めている。ストロングハウスを10棟建て、客土や給水管整備も近く完了する。その他詳細についても検討しているところだ。住宅の件は、応募する人の家族構成などにあわせて町営住宅や民間のアパートなどを紹介するなどしたい。

幸子 私が2年前に「空き家の有効活用について」一般質問した際、副町長の答弁はこうでした。「難しい点もあるが、空き家を放置しておくのは防災上も問題。今後進めていく。新規就農者のためという目的がはっきりすれば農業住宅として活用できる道はある」

空き家の調査は進んでいますか。その活用について考えていますか。

企画財政係長 空き家については、民間231軒のうち、住めない、要修理、別荘などをのぞき、61軒が住める状態にある。空き家活用については検討課題としたい。

町主催のイベントの意味・・・ハイビスカスフェスティバルイン八丈

10月12から3日間、「伊豆小笠原ハワイ諸島文化交流イベント」と銘打った、今秋最大のイベントが開催されました。島外客の見込みが600人も400人と言われたのに、ふたを開けてみると関係者の姿が目立ち、思ったほど人も集まりませんでした。町が旅費など実費を負担した関係者以外に、何人来島したのでしょうか。目的が観光客誘致だとすれば、多額の税金を使った意味は問われて当然です。盛り上がりなかつた原因は悪天候以外にもありそうです。私もプログラムの全部は見えていないので軽々には言えませんが、観客の感想を含めて、見えてきた課題がいくつかあります。

- 期間の長さ・・・3日間は長い。会場に向いても休憩時間にぶつかり見るものがなかった。進行が間延びしていた。1日きりの開催を考えるべきだ。
- 散在する会場・・・会場が数箇所あり分りにくかった。急な会場変更もあった。
- 企画の甘さ・・・コンペが事実上成り立たなかった。トラブルが開催寸前まで続いた。
- フラダンスと伝統芸能のミスマッチ・・・フラダンスはプロ、アマともに素晴らしかったが、伝統芸能もそれぞれの島の独自性が出ていて味わい深かったが、一緒に開催する必然性があつたかどうかは疑問。
- 多額の予算・・・2000万円は多い。予算の決め方、用途になお様々な疑問が出ている。パンフレットも立派すぎたかな。

一方で、成果もありました。これまで見聞することがなかった各島の芸能を見ることで、互いの文化を知る機会を得、貴重な文化交流だったと思います。フラダンスは多種多様で見応えがあり、八丈の活動も個性豊かに育ってほしいと思います。



ピジターセンターでのアーカイブス上映は伊豆諸島の歴史を知る上で興味深いものでした。地味で時間のかかる資料収集作業も多くの住民の協力あつたことでした。

町は、公募による実行委員会を組織し、若手を中心に企画から準備、実行、会計、反省会までのすべてを委員会にゆだねました。多少失敗はありましたが、若い力が育っていくのは歓迎すべきことです。この芽を伸ばしていくのも町の大切な仕事です。

人を呼ぶのは簡単ではありません。イベントをしなければ人は集まらないのか、受け入れ態勢を整え、来島者に満足を与える「もてなし」を充実させることに力を注ぐのか、議論を深めていく時期にきていると思います。地元紙に掲載された投書にあっては、多額の税金を使って実施する行事であれば、なおのこと費用対効果を含めた慎重な計画と、誰もが必要とする詳細な結果報告が求められます。町も、予算を通した私たち議員も深く反省し、イベントのあり方を見直していなくてはなりません。

「離島発 生き残るための10の戦略」(山内道夫、日本放送出版社)。著者は隠岐の島海士町(あまちょう)の町長。膨大な赤字を抱えた町が、職員と住民の努力で独自の施策をたて、それを実行し財政を立て直した話です。町の改革に役立つヒントが満載です。印象的なのが「やってあげる」から「やらせていただく」という姿勢転換。行政に携わる方々も私たち議員も、こうした姿勢で仕事をするのが大切だと思いました。